

第 22 回 九州前方後円墳研究会 宮崎大会

集落と古墳の動態Ⅱ

—古墳時代前期末～古墳時代中期—

橋本達也

大隅・薩摩地域における古墳時代中期の集落と古墳
追加資料 成川式土器編年案 Ver.2

第 22 回九州前方後円墳研究会宮崎大会発表資料集

2019.07.06

編集：九州前方後円墳研究会宮崎大会事務局

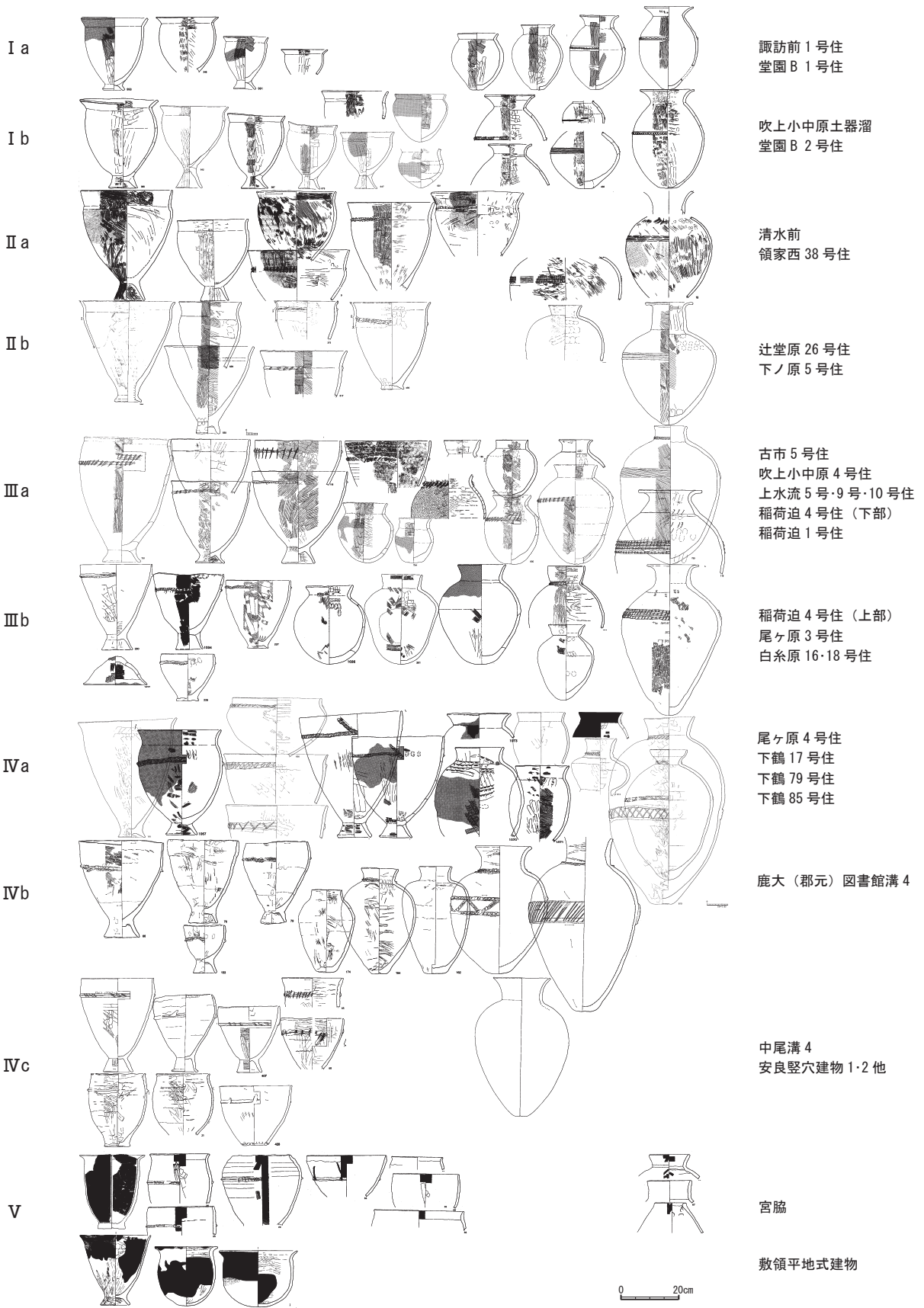


図1 成川式土器編年案1

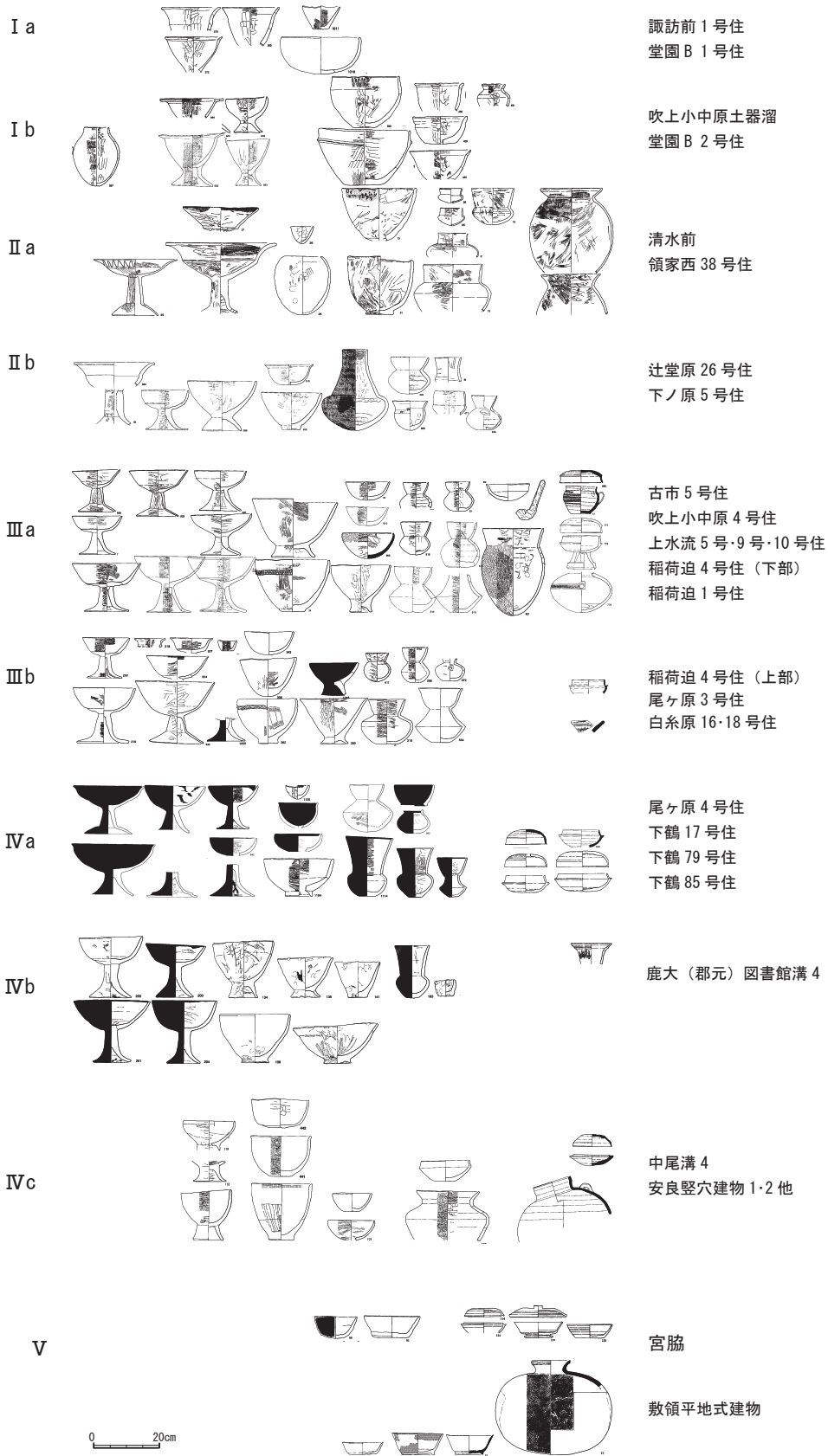


図2 成川式土器編年案2

成川式土器編年案解説 Ver. 2

九州前方後円墳研究会 2019 資料原稿提出後、中期後半～後期前半資料の実物確認を行ったところ、報告書記述を基にした先の認識に修正必要な事例を複数確認したため、Ver. 2 を作成した。今後も適宜修正の必要が出てくると思われる。

基本事項

住居跡出土一括資料による同時性、共伴関係による交差年代を踏まえた編年を進める。従来の一般的な成川式土器編年は属性間の比較によって分類・序列を与えることを軸としており、この基本的な型式学的検討がなされていない方法論的課題のあるものと考えている。もっとも安定的な器種は甕、次いで壺であるが、全体として緩やかな変化・緩やかな範型によるバリエーションの多さによって個体単位では細分が難しい。総じて成川式土器の変化は漸移的である。また成川様式内にも地域差があり、今後は系統ごとの時期区分もより細分化を要する。

I a 式

【甕】口縁部は横方向調整。屈曲、内面に稜線。胴部は丸み。【壺】底部、胴部に 1 条刻み目突帯。やや尖り気味に突き出す小さい平底。頸部から外に開く口縁部のものが代表。中型以下では頸部から直立して外反する形態もあり。【小型器種】口縁部屈曲鉢・椀形鉢・小型平底鉢などあり。高杯・小型丸底壺等は祭祀でみられるが集落ではほとんど出土しない。小型器種は木製が基調であろう。

I b 式

八木澤 2008。【甕】くの字口縁内外面に稜残るが、口縁部・胴部境屈曲が緩くなる。口縁立ち気味増える。胴部下ケズリ痕。胴部の丸み弛緩。【壺】ラグビーボール状胴部。緩く小さい平底。【小型器種】台付鉢、鉢が主体。祭祀遺跡では外来系の影響下に高杯や小型丸底壺などがあるが、集落ではほぼみない。I 式段階は小型器種のバリエーション少なく、量も少ない。

II a 式

【甕】口縁部直立気味やや外反。口縁部縦方向調整(カキアゲ口縁)。口縁-胴部境に貼付突帯出現。突帯無し比率高い。【壺】口縁部直立気味。胴部に多条突帯(三条程度)。【小型器種】口縁部外反の有段大型高杯。大型鉢継続。直立ないしやや斜め口縁・肩の張る球形胴部の小型丸底壺。この段階も小型器種は外来系主体で少なく、集落では台付鉢・鉢主体、高杯はやや増加。

II b 式

【甕】きわめて緩い外反口縁。胴部カーブ少なくなり直線的に外開き。口縁-胴部境内外面とも稜なし。胴部も丸みがなくなり底部から直線的に外開き。突帯有無半々。【壺】口縁直立、端部を折り返し。口唇部に面、稜あり。多条断面三角突帯はこの段階まで。【小型器種】精製赤彩器種の出現。口縁部外反の有段大型高杯杯部が深くなる。外反強い口縁はこの段階まで。単口縁台付き鉢。口縁部外開ないし開きながらやや内湾する小型丸底壺。小型丸底壺の口縁部比率下がる。やや平底気味出現。中期前葉～TK73 型式段階に相当。

III a 式

甲斐 2015。【甕】直立口縁出現。緩やかな外反口縁。口縁端部短く屈曲など併存。無突帯はほぼなくなる。丸底甕が併存する。【壺】口唇部丸くおさめるもの現れる。多条刻目突帯と幅広突帯出現。頸部に刻目突帯出現。【小型器種】小型器種増大・多様化。高杯口縁杯底部の屈曲部から緩やかに外反か斜め直線的な口縁。椀形高杯出現。小型高杯の出現・増大。小型壺多量多量、平底化。小型壺の口縁部はやや傾斜するが直立に近く、やや内湾多い。精製赤彩器種の普及。くの字胴部平底埴形土器出現。TK216～TK208 型式共伴あり。

III b 式

【甕】直立口縁主体。一部に内湾口縁も出現。底部から口縁へ広がる。丸底壺と併存、多く見られる。【壺】口唇部薄くなり丸くおさめる。胴部下半の細長化、尖り気味丸底。大型壺では多条刻目突帯がこの段階まで存在。【小型器種】高杯杯部屈曲部から口縁が外反ないし直立気味に立ち上がり、高杯杯部深くなる。深い鉢増加。小型壺平底化顕著。須恵器 TK23～47 型式共伴あり。

IV a 式

【甕】内湾口縁が増加するが、直立口縁と併存。緩やかな外反口縁も併存。土師甕の影響から屈曲口縁の台付甕も存在。丸底甕も普及。丸底甕は肩が張らずに長胴化。【壺】肩部に丸みを持ち、底部に向かって細長くなる卵形胴部。平底化。大型壺では胴部・頸部に幅広装飾突帯。【小型器種】濃い赤彩土器顕著化。高杯杯部が椀形化。高杯脚中実出現。長い口縁部の平底壺顕著。くの字胴部平底埴形土器顕在化。MT15～TK10 型式段階。

IV b 式

【甕】直立口縁と内湾口縁。中小型甕の増加。丸底甕は希薄化か。【壺】大型壺に胴部・頸部装飾突帯が顕著。中型・小型と精粗のバリエーションが豊富。突帯無し中型粗製壺多い。中型では頸部のみ突帯ありも多い。底部は厚く平底状。【小型器種】粗製鉢・台付鉢の多様多様化、増大化。長い口縁部の平底壺この段階まで。くの字胴部平底埴形土器顕著～この段階でなくなる。MT85～TK43 型式段階。

IV c 式

中村 2009。【甕】突帯の刻み目疎ら。突帯の刻みが減少から消失へ。刻みのないものがより新しく、この段階をさらに前後に細分できる可能性もあるが、資料数が少なく現状では不明確。外面にミガキ例あり。中・小型甕主体で、総じてサイズが小型化する。口径・高さ 25cm 以上の大型甕はみない。丸底甕もなくなる。【壺】大型壺は継続するようであるが稀薄化。[土師器-須恵器]の影響か。サイズバリエーションも不明。須恵器甕に置換か? 【小型器種】台付鉢、鉢はこの段階まで継続。杯の普及。前段階より小型化した高杯が存在するが一括資料で良好な出土例がない。杯部も定型的でなく土器型式として安定していない。【その他】甗、散見。須恵器模倣の杯・高杯・甕などあり。TK209 型式～7 世紀中葉ころまでか。

V 式

細分が必要であるが良好な資料がわずかしかない。【甕】外反口縁。有突帯台付甕の存在する V a 式、無突帯台付甕に古代土師器系甕が伴う V b 式に別けられると考えるが、資料数が少なく変遷過程が不明で現状では編年的区分を保留。大型甕はない。【壺】壺は少なくなっている。大型壺なし。【小型器種】杯のみ。杯の口縁部は高く深い。7 世紀後葉以降、8～9 世紀代。